

## 研究ノート

### メディア・イベントとしての「マナスル登頂」(1)

黒田 勇

### The first ascent of Mt. Manaslu as “Media Event” (1)

Isamu KURODA

#### Abstract

The aim of a series of these essays is to analyze the way of media reportages on the first climbing of Mt. Manaslu by the Japanese expedition in 1956 and the social influence of the series of the events from the point of view of the theory on “media event”.

Part (1) makes brief descriptions on the history of mountaineering in Japan, on the history of promoting the sports events and explorations by the Mainichi Newspaper, which supported the expedition to Mt. Manaslu.

Keywords: Mt. Manaslu, media-event, mountaineering

#### 抄 録

本研究ノートでは、1956（昭和31）年当時の日本社会に大きなインパクトを与えた「マナスル登頂」に関わるメディア言説を分析するため、主として遠征に関する一連の新聞報道を取り上げる。さらに、その背景となる日本における「登山文化」の発展と、マナスル遠征を後援した毎日新聞のスポーツに関わる新聞事業の歴史も概説する。

キーワード：マナスル登頂、メディア・イベント、登山文化

## はじめに

本研究は、1956（昭和31）年当時の日本社会に大きなインパクトを与えた「マナスル登頂」に関わるメディア言説と、その背景となる日本における「登山文化」、そしてそれがメディア・イベントとしての「マナスル登頂」とどのように結びつき、敗戦後10年の日本人にどのような意味を付与したのかを明らかにしようとするものである。その研究の前段階



図1 「マナスル登頂記念切手」  
(1956年11月発行)

として、本研究ノートでは、「マナスル登頂」の背景となる、日本人にとっての「登山」とは何だったのかを振り返り、次に、実際の新聞報道がどのようになされたのかを明らかにしたい。

## マナスル登頂の概要とメディア・イベントとのかかわり

マナスル登頂は、1952年8月に登山準備のため、今西錦司隊長以下6名の踏査隊のネパールへの派遣から始まった。

1951年にサンフランシスコ講和条約が調印され、翌年、その発効とともに海外登山が可能となり、京都大学山岳学会（AACK）は早速ヒマラヤの8000m級への登山の計画を企画し、京都大学教授今西錦司はその目的地を未踏峰マナスルとして計画は動き出した。1952年2月にはAACKの西堀栄三郎がネパールに入国し、調査と登山許可の申請を京都大学の名で行ったが、8000m級の山を京都大学だけで独占するべきではないという意見から、マナスルの登頂計画は、日本山岳会に委譲されたという<sup>1)</sup>。1952年4月、日本山岳会はヒマラヤ委員会を組織し、マナスル登頂計画の全責任を負うこととなる。5月には許可が下り、8月今西錦司を隊長とした踏査隊がマナスルの偵察へと向かい、現地調査の目的を遂行し、無事帰国した。

その後翌年、一次登山隊は三田幸夫（慶大山岳部OB）が隊長となりマナスルへと向かうが、頂上手前375mで悪天候のため退き返した。さらに、翌年の堀田弥一郎（立教大学山岳部OB）を隊長とした二次登山隊は、マナスルの麓の住民の抵抗にあい登頂を断念せざるを得なかった。1955年の遠征は資金不足から見送られ、翌1956年に楨有恒（慶大山岳部OB）を隊長とし三次登山隊が送り込まれ、5月9日、ついに今西寿雄隊員とシェルパのガルツェンがマナスルの登頂を果たした。そして、朝日新聞とのスポンサー争いを勝ち抜いた毎日新聞は、4回のマナスルへの遠征全てに記者を同行させている<sup>2)</sup>。

2006年、登頂50周年を記念して当時の隊員の松田雄一が日本山岳会の機関紙への寄稿で、当時の模様を次のように述べている。

第三次登山隊、楨隊長以下12名は、マナスルの山麓まで順調にキャラバンを進めた

1) 池田常道（2015）163-164頁

2) 同上書、および毎日新聞社編（2002）下巻 144-150頁

が、ここで再びサマ村民の登山阻止に遭遇した。しかし今回は槇隊長の誠意ある交渉で4000ルピーの僧院修復費用(当時の金額で約20万円)の寄進で解決することができた。

この隊は25歳から62歳までの年齢構成であったが、すべての隊員を平等に扱う槇隊長のリーダーシップのもと、ガルツェンを隊員に加えたチームワークは素晴らしかった。槇隊長は、とくにルートやキャンプ地の選定には慎重であった。プラトーや北峰からの雪崩、アイスフォールの通過には、万全を期し、高所へキャンプを進める前に、槇隊長の指示で、展望のきくナイケ山の中腹まで登り、終日雪崩の観察をさせられたことなど、今でもよく覚えている。

幸い、登頂時期の好天の予測も的中し、5月9日、今西寿雄、ガルツェン・ノルブの2名が第一次登頂に成功。引き続き11日、加藤喜一郎、日下田実も第二次登頂に成功した。後に登山隊に同行した毎日新聞写真部員の依田孝喜の撮影した映像をもとに「マナスルに立つ」の題で映画化されており、ナレーションには当時人気俳優であった森繁久弥が起用されている。詳しい行動については槇有恒著『マナスル登頂記』(毎日新聞社刊)にゆずることにするが、依田孝喜撮影によるドキュメンタリー記録映画『マナスルに立つ』(映配・毎日映画社制作、文部省特選)は映像としても記録(とくに8000メートル山頂での動画は世界で初めて)として申し分なかった。そのため、ドキュメンタリー映画部門のロードショーで新記録を樹立し、多くの人の共感をよび、わが国に登山ブームをもたらす要因にもなった<sup>3)</sup>。

松田が振り返るように、このマナスル登頂は、毎日新聞社の後援の下で、新聞報道だけでなく、出版、映画においても成功し、さらに同年11月3日、日本山岳会隊の登頂を記念した記念切手が郵政省から発行されたことにも象徴されるように、戦後11年を経ての日本の復興期の一大イベントであったといえよう。本稿では、このマナスル登頂がどのようにメディアによって伝えられたのか、そして当時の日本にどのようなインパクトをもたらしたのかについて、メディア・イベント論の立場から改めて考察してみたい。

ダヤーンとカツによる「メディア・イベント」<sup>4)</sup>の概念が日本でも紹介される中で、吉見俊哉は、メディア・イベントという概念には3つの重層的意味が内包されるとした。①新聞社、放送局など企業としてのマス・メディアによって企画され、演出されていくイベ

3) 松田雄一(2005)

4) ダニエル・ダヤーン/エリユ・カツ(浅見克彦訳)(1996)

ント、②マス・メディアによって大規模に中継され、報道されるイベント、③マス・メディアによってイベント化された社会的事件＝出来事、の3つの側面である<sup>5)</sup>。吉見は、津金沢らとともに、新聞事業も含めて、日本近代のメディア・イベントを研究する文脈の中で、日本における新聞社の事業を含めているが、ダヤーンとカッツは、基本的にはテレビによる生放送を前提として分析を進めている。本論においては、ダヤーンとカッツのメディア・イベントの考え方を借用するが、基本的には、かつての津金沢らが取り組んだ日本における新聞事業としてのメディア・イベントの考え方を踏襲するものである。

また、ダヤーンとカッツによるメディア・イベントの3タイプ (a) 競技型 (b) 制覇型 (c) 戴冠型のうち、本論で扱うマナスル登山は制覇型に分類されるだろう。ダヤーンとカッツにおいては制覇型の代表例としてはアポロ11号の月着陸を取り上げている。そこでの制覇型の特徴として、「ルールを破る傾向。偉大なものは、それまで受け入れられてきた制限に挑む。(中略) 制覇型のメッセージは、偉大な男や女がやはり私たちのあいだにもいて、そうした人の手に歴史はかかっている」ようなタイプとされ、さらに「主役となる演技手」は「英雄的カリスマ性」を必要とし、「視聴者」はそれを「畏怖の念」を持って眺めるのだという<sup>6)</sup>。日本隊のマナスル初登頂を、彼らの「メディア・イベント」論になぞらえれば、「主役となる演技手」である登山隊は、8000m級の山の「登頂不可能」というルールを「可能」に書き換えたということになる。ただ、後に述べるように、「オリンピック」のたとえを使用するなど、あくまで日本社会における言説としてではあるが、「競技型」としての側面も有していた。

## 第一章 日本における登山

### 1. 中高年の「登山ブーム」

1990年代半ばから、「中高年の登山ブーム」といった新聞記事が増加するように、中高年の登山は、1990年代に増加し始め、文部省登山研修所の統計によると1997年の登山人口は約588万人でそのうち70パーセント以上が40歳以上の中高年であるという<sup>7)</sup>。

なぜ、中高年は山を目指すのか。藤田健次郎は、「中高年層が好んで山に行く動機や理由には、自然志向、仲間との親睦交流、ストレス解消・健康増進を含めた遊びという要素が

5) 吉見俊哉 (1994) 156～157頁

6) ダニエル・ダヤーン／エリユ・カッツ (1996)、120頁

7) 梅棹忠夫・山本紀夫 (2004) 8頁

ある」と分析する<sup>8)</sup>。また、雑誌「山と溪谷」においては、20代から60代以上の各年代20人ずつ合計100人の読者に「山に登る理由は何か」を尋ねている。全体として1位は「展望・景色が好きだから」で、2位「健康づくり」である。年代別には、20代、30代は「展望・景色」とともに「達成感・ピークハント」が上位を占め、40代は「リフレッシュ」が1位、「健康づくり」が2位となり、50代、60代以上で1位「展望・景色」で2位「健康づくり」となっている<sup>9)</sup>。

それでは1990年代になって中高年が山へと向かった理由は何なのか。まず、交通手段、通信手段の飛躍的発達、登山装備の飛躍的改善などにより、登山がかつてほど危険、あるいは冒険的なスポーツではなくなったことによる。ただ、青少年の登山者の減少傾向を見れば、それだけでは説明がつかない。

先に松田雄一が回顧したように、1960年前後の登山ブーム時に15歳から30歳であった人は、1990年には45歳から60歳になっている。年齢からくる「健康志向」と「青春時代」への懐古もあるだろう。さらに、この懐古の念の中には、かつてのあこがれのスポーツである登山への挑戦という意味もあるかもしれない。のちに述べるように、登山はエリートのスポーツであり、とりわけストイックなスポーツというイメージがあった。それだけに、若い時にはできなかった登山を改めてやりたいという気持ちになるのかもしれない。

また深田久弥の「日本百名山」(1964)による登山目標の数的明確化も中高年の登山にやりがいをもたらした。現在では中高年の登山が流行するにつれ、旅行社が企画するツアー登山や中高年対象の登山ガイドブック、登山教室が増え始めた。これも後に述べるように、1930年代後半の国家的な取り組みとしての登山やハイキングが奨励されたことと類似した形態で、今度はより商業的に中高年登山の市場が開発されたことにより、さらに中高年の登山者を増やすこととなった。

## 2. 登山の黎明

明治以前の日本においては、登山そのものに好奇心や探検心・冒険心を抱き、初登頂・初登攀を目指し、心技体をスポーツのトレーニングを積むように鍛えるという理念はなかった。登山は生活の一部であり、信仰の手段であった。鈴木正崇「山岳信仰」の前書きで

8) 藤田健次郎 (1997) 181~186頁

「中高年者の登山の動機に関する研究」[筑波大学体育科学系運動学類運動学研究第五巻] (1989年) の30歳以上391人に対するアンケートと、「長野県山岳総合センター」の機関紙「所報第四五号」(1991年) 所収の「中高年登山の実態調査」、50歳以上200人と日本アルプスの山小屋35カ所対象のアンケート結果を分析している。

9) 「山と溪谷」2007年1月号

次のように記している。

（山は）「人々の生活の根源をなす水源地であり、河川や湧水は田畑を潤し農作物を育んで日々の暮らしを支えるとともに、森林や動植物、さらには鉱物などの資源をもたらす豊穡の源泉であった。しかし、時に山は噴火、山崩れ、洪水などによって人々を死の淵に追いやることもある。まさに山は畏怖すべき大自然であり、神仏の居所、降臨の地、神霊の顕現など多様に意味づけられて、人々の暮らしとともにあった。」<sup>10)</sup>

かつて、山に登るのは、生活者が食材等を取りに入る以外は、修験道の修験者であり、その信仰に関わる一般の人々の登山であった。修験道は、真言宗、天台宗の密教から派生した「宗派」であり、もちろん、そこには幾ばくかの娯楽の意味も含まれていたが、交通手段や登山装備が現代とは比較できないほど低劣な時代には、登山はやはり「苦難」「苦行」以外の何物でもなかったようだ。ただ、江戸時代となると、修験道法度も制定され、修験道の組織も整理統制されるようになる。そして、「羽黒山、大峰山、彦山などの修験の拠点や山岳信仰の中心地は、権力者の寄進に頼るだけでなく、信者の組織化を推進し、登拝講の生成に努め、民衆の経済的上昇に支持されて発展する。山麓には、参詣する道者の便宜を図る御師の集落を形成して、信仰と娯楽を組み合わせた。周辺地域では、男性は十五歳の登拝を通過儀礼とする習俗が定着し、遠方の場合、代表を派遣して登拝する代参講が盛んになった」とされる<sup>11)</sup>。

要は、修験道による山岳信仰においても、江戸時代には民衆化が進み、娯楽の要素も入ったと鈴木は評価している。

さらには、日本を代表する富士山においても、貞観期の活発な活動期を経て平安時代末期の沈静期に入ると、遠くからの遥拝の対象から登拝の対象となったとされ、やはり、江戸時代になると江戸を中心として「富士講」が盛んとなり、一時期は幕府によって禁制令も出されるほど流行したという。富士登山は、確かに信仰上の登拝ではあったが、江戸からの富士登山旅行は、登山とともに、江ノ島での「精進落とし」もセットされており、「参加する若者にとっては成人式であるが、世間を知り、御託を楽しむ機会にもなった<sup>12)</sup>」という。

江戸時代には、信仰と娯楽、聖と俗が融合しつつ、「山登り」という行為が庶民の関心を

10) 鈴木正高 (2015) i頁

11) 同上23頁

12) 同上152頁

呼んでいたと言えるだろう。

### 3. 明治以降の登山

ここまで、近世の富士登山を記載すると、近代以降の登山とそれ以前に決定的な断絶があるとは言いがたくなる。たしかにヨーロッパの近代スポーツという観点からの登山ではないが、江戸末期から、そして明治以降も日本の山々の登山者は少なくなかった。取り分け明治以降、登山愛好以前には、「測量」を目的とした登山があり、明治政府の役人たちが測量を目的として高い山の頂上を目指していた<sup>13)</sup>。

登山という行為そのものを楽しむ近代的登山（アルピニズム）は、明治の中期に持ち込まれている。近代登山、西洋の登山思想とはいえ、西洋、つまりヨーロッパにおいても、近代以前には「登山」はスポーツではなかった。日本や他の地域と同様に、宗教的な意味を持った行為だったことは言うまでもない<sup>14)</sup>。

さて、西洋、あるいは英国発祥の近代的登山の考え方が日本で普及するきっかけになったのは、1894年に地理学者の志賀重昂の「日本風景論」の出版によるとされる。この本は、志賀がイギリスの美術評論家で山岳美論を唱えたラスキンや、イギリス人登山家で宣教師 W. ウェストン<sup>15)</sup> に影響を受けて書かれたものとされる。「日本風景論」が出版された年は、日本は日清戦争を戦っており、ナショナリズムが高揚する中で「日本風景論」も日本の素晴らしさを伝えた日本礼賛の書物として読まれ、その後も読み継がれてきた<sup>16)</sup>。

1905年には「日本山岳会」が発足する。日本山岳会は、機関紙「山岳」を通して、信仰登山がメインだった日本において、それまで少数派だった登山を楽しむ人々の拠り所となり、また近代登山思想の普及の役割を果たしたとされる。そのなかでも日本山岳会の創設者の一人である小島烏水は、志賀の影響を強く受け、アルピニズムに関心もち、後にウェストンによって、イギリスには「アルパイン・クラブ」という山岳会があることを知り、ウェストンの勧めもあり、山岳会設立を決意したとされる。そして、日本山岳会発足後10年で、それまで信仰対象としても登られることのなかった日本アルプスも、すべて登頂されることとなった。

そして、1910年代から20年代にかけて高等教育機関の拡大期には、大学や旧制高校に山

13) 小泉武栄 (2015) 157-164頁

14) 小泉武栄 (2001)

15) ウェストン (Walter Weston, 1861年-1940年) は、イギリス人宣教師として日本に3度長期滞在した。日本各地の山に登り、日本アルプスや当時の日本の風習を世界に紹介した登山家である。

16) 小泉、前掲書、144~145頁

岳部やその前身となる「旅行部」の創設が相次ぐ。後にマナスル登山隊の隊長として日本隊を初登頂に導いた榎有恒も、慶応義塾大学在学中の1915年に慶応義塾山岳会を創設している。

この間の登山の発展と変化については、三度にわたって日本に滞在したウェストンの記録からも読み取ることができる。最後の日本滞在であった1911-1915年にかけての日本の登山の様子は、「日本アルプス再訪」に記されているが、この時期には、特別なエリート層だけではない登山客の様子が描かれている<sup>17)</sup>。

#### 4. 1920-30年代における大衆登山とエリート登山の分化

20世紀初頭から1930年代にかけて、登山は「現在の大衆登山とつながるグループと尖鋭的な登山を目指すグループとに、二極分化」<sup>18)</sup>していったと小泉は指摘する。当時の学生たちは、ヨーロッパの登山を学び雪山登山やロッククライミングなど、より困難なルート選び、初登頂や初登攀を目指して登山活動を行っていき、この時期までには、スポーツとしての登山が確立された。「尖鋭的な登山」を目指すグループは大学生や、若いOBが中心となっていたため、当時の大学進学率の低さから考えるとエリートのスポーツであった。そして、この時期に、著名な登山家や大学生の遭難事故がいくつか起こり、社会に衝撃を与え、それがさらに厳しい登山に駆り立てることになったという<sup>19)</sup>。

一方、「大衆登山」へとつながる形態としては、20年代の余暇の増大と都市新中間層の台頭とともに、簡易な郊外娯楽としてまずは拡大していく。その一例として、大阪毎日新聞『夏季付録』（1924（大正13）年7月13日付）において「最好期来る 登山と海水浴」という見出しの下で、阪神間の人々にとって郊外レジャーのとして六甲山登山が紹介されている。明治時代から六甲山に別荘を持つイギリス人が娯楽として六甲山頂でゴルフを楽しんでいたが、一部の人々の娯楽だったゴルフに比べ、登山は健康と修養のために広く受けられ、大正から昭和にかけて全盛期を迎えたと指摘される<sup>20)</sup>。

17) ウェストン（1996）228頁

18) 小泉、前掲書、179頁

19) 同上、181-182頁

20) 田井玲子「阪神間モダニズム」展実行委員会（1997）所収、196-198頁



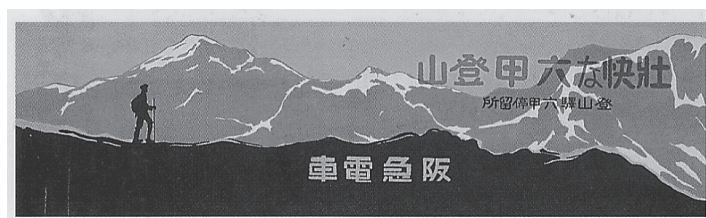


図2 阪急電車 六甲登山の案内<sup>21)</sup>

「大衆登山とつながるグループ」の登山は、1930年代に国家の政策にまで発展したハイキングブーム（徒歩旅行）ブームによっても普及拡大していく。1930年代は国家によるツーリズム・観光事業への取組みが開始された時期であり、地域社会では旅客を誘致し地域経済を潤すため観光資源の開発や整備が行われた。この観光宣伝の活発化によりツーリズムは拡大されていった。そのきっかけとなるのが、関西のハイキング（徒歩旅行）ブームである。

1932年大阪市は都市政策の一環として、ドイツのワンダーフォーゲルにヒントを得て「大阪遠足聯盟」を結成した。その結成に際しては、「我大阪市は産業都市として、市民の日常生活に都市生活の弊害を受けることが少なくない。而して之を医するには、市民に郊外進出を奨励し、大自然に親しむことが最も適当」と謳われている<sup>22)</sup>。さらに、大阪市は関西の各私鉄と連携し、「市民遠足デー」も実施した。そして、先にみたように20年代から郊外活動に熱心だった阪急電鉄は、1934年に「阪急ワンダーフォーゲルの会」を組織し、徒歩旅行をも経営戦略に組み込んでいった。

こうした都市政策としてのハイキング奨励は、1934年には国家レベルでも計画実施されることとなる。鉄道省による「ハイキング・キャンペーン」は、JTBの成立とも関わっている。「旅行を国民生活の源泉力足らしめんとし、…国民保険運動並びに精神作興運動に積極的に進出」しようと宣言し、鉄道省は、東京日日新聞、大阪毎日新聞やJTBとともに、ハイキングコースの選定や標語の募集選定を行い、国鉄だけでなく、各会社もそれに合わせての割引運賃などを決定し協力していった<sup>23)</sup>。

これらの事業は、確かに「都市民衆を『自然』と結びつけることで都市の『不健康性』を矯正せんとする」国家による国民管理政策の一環としてとらえることができるが、ハイ

21) 「阪神間モダニズム」展実行委員会（1997）9頁

22) 高岡裕之（1993）18頁

23) 同上 19-20頁

キングブームの一面には「暇も金もない大衆がささやかな形ではあるがツーリズムに参画するようになったという、ツーリズムの底辺の拡大があった<sup>24)</sup>」のであり、この時期は、大衆、あるいは都市の新中間層が健康を求め、郊外の余暇活動を「欲望」し、エリート層の「登山」が底辺へ拡大した時期でもあった。

その後1930年代後半、戦時色が強くなるにつれて、ツーリズムの意味合いもまた変化する。旅行もまた国民精神総動員運動のもとで位置づけられ、「心身鍛錬の観点」から各種体育・スポーツ・ハイキング・登山・スキー・海水浴は「体位向上」のために奨励されるようになる。こうして、20年代から30年代にかけてのモダニズムの風潮にも乗った新たな大衆娯楽としての健康にかかわるツーリズムは国家主義的な再定義されつつ、さらに拡大していくことになった<sup>25)</sup>。

ただ、登山の「大衆化」については「尖鋭的」登山家からは批判もあった。高岡によれば、1935年当時の日本山岳会会報の寄稿文に「ハイキングをする人々のマナーの悪さ」を指摘したのがあり、「彼ら（昔からの登山家）にとって『ハイカー』とは、山を『俗化』する軽佻浮薄な『大衆登山』の代名詞だった」としている<sup>26)</sup>。この時期、登山について二つの流れとなって発展してきたとしても、大衆社会におけるエリートによる大衆、あるいは大衆文化批判は、登山においても必然的に発生したと言えよう。

その一方のエリートによる登山は、20年代から30年代にかけて、秩父宮をはじめ、その他海外駐在のエリート層がスイスアルプスを登山し、また英国統治下のインドからヒマラヤや米ロッキー山脈に挑戦する者たちが出てきた。その中では1936年の立教大学山岳部によるナンダコット峰（6867m）初登頂が戦前の最高峰であり、最後の本格的な海外遠征登山であった<sup>27)</sup>。

## 第2章 新聞事業としての登山

### 1. 毎日新聞による後援事業

マナスル登頂に対する援助に関して、毎日新聞社の事業の一環として位置づけたが、毎日新聞百年史において「新聞事業」の目的を以下のように述べている。

---

24) 同上

25) 同上、26～28頁

26) 同上、22頁

27) 堀田弥一（1986）

「元来『新聞社の事業』というのは本務の『新聞発行』は含まない。新聞のイメージを高め、人々に新聞の名を知らしめ、親近感を抱かせるなど、本業である新聞の発行を助け、また販売を促進することを目標にする。」とその目的を明らかにし、「新聞の事業には、もちろん巨額の経費が必要ですが、新聞発行で得た利益を、このような形で社会に還元することは、公器としての新聞の使命であると信じています。民主的、道義的平和的な社会の確立に寄与するという紙面作りの根本方針を、行動で裏付けながら、積極的に推進する」とする<sup>28)</sup>。

毎日新聞はスポーツにおいても、中等学校、大学の様々な競技大会の主催を行ってきた。

先の「毎日新聞社史」によれば、1901（明治34）年12月、堺大浜で50マイル長距離健脚競走を催している。これは、新聞社がスポーツ大会を主催した最初であり、10万人の観衆を集めたという。さらに、「1905（明治38）年8月には海上10マイル長距離競泳（大阪築港～御影魚崎間）を開催、紙面で大々的に報じた。この競泳は水泳熱を促進して学校その他に優秀選手をつくる機運をつくり、わが社は翌06年、浜寺と阪神打出海岸に海水浴場を開設、海泳練習所を設けた。08年には全国中学校庭球大会を主催、中学校レベルでのスポーツの全国大会として最初のものとなった。また09年3月、神戸東遊園地——大阪・西成大橋間で日本最初のマラソン大会を主催した。」<sup>29)</sup>

さらに、社史に従えば、1910年代から20年代にかけて、次のようなスポーツ関連事業を展開している。1912年4月、大阪・十三大橋——箕面間で日本初のクロスカントリーレースの主催。11年3月、大阪毎日新聞と東京日日新聞社は合併後、1913（大正2）年日本環海海流調査。10月、豊中運動場で国際オリンピックの標語「健全なる精神は健全なる身体に宿る」を掲げて第1回「日本オリンピック大会」を主催。

1915（大正4）年7月、第1回全国中等学校競泳大会（大阪市運動プール）。16年4月、将棋棋譜の連載開始。17年8月、実業団庭球大会を浜寺公園で開催。18年1月、第1回日本フットボール大会（のちの全国中等学校ラグビー大会）開催。豊中でサッカーとラグビーを併せ行う。19年8月に「毎日庭球選手権大会」（東日庭球トーナメント）が一つ橋コートで、2年遅れて21年10月には「全日本庭球選手権大会」が豊中コートで開始。19年11月、全国学生相撲選手権大会、全国中等学校相撲選手権大会開始。20年5月に初の実業団チーム、大毎野球団を結成。同年6月、大阪本社に事業部、東日に事業課を新設し、主催のス

28) 毎日新聞百年史刊行委員会（1972）544頁

29) 毎日新聞社編（2002）別巻、122頁

ポーツや講演会・映写会関係を統括。1924（大正13）年4月、全国選抜中等学校野球大会が名古屋八事の山本球場で8校参加のもとに開催。登山関係では、25年7月、本社後援で榎有恒らがカナディアンロッキーのアルバータ山に登山。

このように、ライバル朝日新聞社との販売競争の中で、とりわけ1910年代から20年代へとスポーツ関連事業に熱心に取り組んでいる。この時期、各学校において、スポーツ競技への関心が高まり、様々な競技団体が生まれ、社会にスポーツが普及していく時代ではあったが、メディアはその流れに乗りつつ、スポーツ事業を推進し、それがまた社会のスポーツへの関心を高めていく循環となっていった。

## 2. 戦前の登山・探検後援事業

毎日新聞は、各種スポーツや探検の後援を行っているが、戦前の登山後援としては、1936年の日本で初のヒマラヤ遠征でナンダコット峰（6867m）初登頂を成功した立教大学山岳部に対する後援が最も大きい。また、直接援助していたわけではないが、1905年に当時鎖国政策をとり、まったくの秘境の地であったチベットに潜入し2年間滞在した後、帰国した僧侶の河口慧海の探検記を連載している。当時の新聞紙上では、「探検記が目玉商品となった」といわれている<sup>30)</sup>。

さらに、マナスル登山隊の隊長である榎有恒が1921年にヨーロッパアルプスのアイガー東山峰に初登攀したときの手記も大阪毎日新聞、東京日日新聞が独占的に掲載している。榎は現地で登山隊を組んでアイガー東山稜の初登頂に挑むのだが、毎日新聞は榎が毎日新聞に記事を書くことを条件とし、援助を行っている。このように毎日新聞は探検的的事业に対して昔から援助を行ってきた。その探検的的事业の中に登山も含まれるようになっていったのは近代的登山の考え方が普及してからである。ただ、探検的的事业に対する援助は、毎日新聞だけが頻繁に行っていたわけではなく、他紙も同様に行っていた。

朝日新聞は、日中戦争の開始とともに、海外登山の道を閉ざされた今西錦司たちの朝鮮中国国境の白頭山への登山を後援している。これは、のちのマナスル登頂につながるもので、今西たちは、のちの大陸の高山への挑戦のための準備と位置づけたとされる<sup>31)</sup>。ちなみに、これを契機として、千島、樺太、朝鮮、台湾などの当時の日本領土の辺境への探検、登山に各大学が取り組んだとされる<sup>32)</sup>。さらに、今西らは戦後人類学で活躍する梅棹忠夫ら

30) 小泉前掲書、144～145頁

31) 同上、186頁

32) 同上

とともに、南のポナペ島や大陸の大興安嶺の探検も行い、高度な報告書を残している。当時の日本の領土拡大政策に乗る形で、アジアの探検を行い、結果としてその政策に貢献することにもなったと言えよう。

第二次大戦後であるが、朝日新聞は1955年9月22日朝刊で「日本学術会議が国際地球観測年(略称IGY)の事業として南極へ学術探検隊を派遣するにあたりこの歴史的壮舉に参加し、全機能をあげて後援する」と報告し、その後の「南極観測」の後援を大々的に行なっている。この南極観測については、マナスル登頂の同年に始まり翌年にかけての一大イベントとなった。とりわけ1957年の第一次観測隊が残した犬のうち、翌年の二次観測隊の再到着まで生き残ったタロとジロの物語によって、マナスル登頂以上の大きな反響を呼ぶことになった。これについては井川の「メディア・イベントとしての南極観測支援事業」に詳しい<sup>33)</sup>。

### 第3章 メディア・イベントとしてのマナスル登頂

1956年の初登頂について、「毎日新聞社史」は、ヒマラヤ初登頂を、オリンピックになぞらえ、そして長年彼らが援助した結果として、次のように誇らしげに記録している。

1956(昭和31)年5月9日、日本山岳会隊はネパールのマナスル(8156メートル、当時は8125メートルとされた)に初登頂した。世界に15座しか数えない、ヒマラヤ・ジャイアントと呼ばれる8000メートル峰。文字通りの高峰のひとつに日本人が初めて登頂した壮舉で、いわゆる“ヒマラヤ・オリンピック”での金メダルだった。

登山隊を後援した毎日、18日朝刊の1面で社説と余録を除き、全面的に報道した。カトマンズ発、浅岡光正特派員の特電に付けられた「巨峰マナスル登頂ついに成功」の見出しには、本社の思いが込められているようだ。毎日がマナスル登山の全面的な後援を京都大学側に約束してから5年がかり。計画が京大から日本山岳会に委譲されて、わが国の山岳界が総力を挙げて挑み、3度目の登山隊で、やっと登頂に成功した。総経費は1億円を超え、毎日はその資金を担ったのだから。<sup>34)</sup>

33) 井川(1998)

34) 「毎日新聞社史」下巻、144頁

## 1. 成功までの経過

はじめに述べたように、マナスル登頂に関わる記事については、毎日新聞は、1952年の偵察隊の派遣から詳しく報道している。最初の記事は、「ヒマラヤの巨峰マナスル探検」の大見出しの他、「偵察隊一行・二十五日に空路出発」「アジアの秘境を開く」という見出しの下で、マナスル登頂を目指し、まず偵察隊の派遣から開始されることを告知することから始まった<sup>35)</sup>。この偵察隊の報道は、最初の記事から52年の年末までの5か月間で26回を数えている。

そして、年が明けて1月8日には、この後、初登頂成功までのマナスル登頂報道のキーワードの一つである「ヒマラヤ・オリンピック」という言葉が提示される。

この偵察隊派遣を経て、翌1953年、そして54年と二年続けて、マナスル登頂に挑戦しているが失敗している。「はじめに」で記したように、1953年、一次登山隊は三田幸夫（慶大山岳部OB）が隊長となりマナスルへと向かうが、頂上手前375mで悪天候のため退き返した。さらに、1953年の堀田弥一郎（立教大学山岳部OB）を隊長とした二次登山隊は、マナスルの麓の住民の抵抗にあい登頂を断念せざるを得なかった。そして1955年の遠征は資金不足から見送られた。この間も、当然、毎日新聞が支援し、53年に102本の記事、54年には129本の記事、そして遠征が中止された55年でも61本の記事が掲載されている。

これらの記事は、遠征の様様についての直接の報道記事から、日本での反響、遠征資金募金をはじめとした支援体制の告知、遠征の意義など、継続的でありかつ多岐にわたっている。

## 2. マナスル登頂成功

「巨峰マナスル登頂ついに成功」と一面に大きく報道されたのは5月18日の朝刊であった。「9日、11日の二回とも」という小見出しもあるように、登頂成功から一週間余りが経過していたが、通信技術が発達していなかった当時は、ヒマラヤ山中の登山隊から、日本まで情報を伝えるのに、「飛脚」と電報を用いて1週間ほどを要していた。登山隊の動向を伝える記事は1週間遅れで随時掲載していた。

同日の1面では鳩山首相、清瀬文相、重光外相がそれぞれに「全国民の喜び」とコメントを寄せ、また3面では秩父宮妃、ヒマラヤ登山後援会世話人細川護立、国立遺伝学研究所長（京大教授）木原均、日本山岳会副会長松方三郎、南極地域観測隊副隊長西堀栄三郎、

---

35) 毎日新聞、1952年8月18日付朝刊一面

総理府内閣調査室次長（前カルカッタ総領事）粕谷孝夫のコメントが掲載されている。さらに、9面ではマナスルの踏査隊、一次・二次登山隊の隊長が祝福している。

同日夕刊一面では、エベレストの初登頂を果たしたイギリス登山隊隊長ハントのコメントが「成功を信じていた」という見出しで掲載され、さらに、同じ一面に作家であり登山家の深田久弥による「肩身が広がった ノーベル賞に劣らぬ光栄」との見出しでコメントが掲載されている。翌5月19日も祝福のコメントは続き、ニュージーランド、オーストラリア、ドイツのいずれもヒマラヤの8000m級の山の山頂に立った各国の登山家達が祝福している。こうして、改めて、世界が競争する中の偉業であり、世界に評価されたという意味付けがなされていく。

毎日新聞の後援事業ではあっても、これだけの「世界的成功」を他紙も無視できない。当時は、現在ほどに排他的なメディア事業ビジネスという概念が成立しておらず、マナスル遠征の計画や出発、その後の経過は、他紙においても毎日新聞よりは少ない報道量ではあったものの逐次報道されていた。したがって、朝日新聞も同日に報道している。カトマンズ発ロイター電として、「マナスルついに征服」という大見出しのもとで「頂上攻撃二度とも成功」「日本人初・八千メートル突破」と小見出しがついている。さらに、「毎日新聞東京本社に入った情報によると」との注記の下で、「ヒマラヤ登山後援会」提供の写真を掲載している。ここでも、第一次遠征隊長三田幸夫のコメントを掲載し、「成功のおかげに科学の力が大きくものをいった」と、成功と科学を結び付けている。ただ、この記事に並んで、「明日から立山訓練 南極探検 用具のテスト」と、朝日が後援する「南極探検」の準備についての記事も掲載している。

さらに、読売新聞も同日、「マナスル頂上を征服」の見出しの下、写真と地図も含めて、毎日新聞本社に入った「電報によると」とのクレジットで記事を掲載、同様に三田前隊長と日本山岳会松方三郎副会長のコメントも掲載している。読売新聞も2月2日の遠征隊の神戸港出発以来、17本の記事を掲載しており、毎日新聞の全面的な後援のもとに実施されたとはいえ、マナスル登頂が「国民的なイベント」であったことを窺わせる。

初登頂の報が入った翌日の5月19日の毎日新聞社説では「マナスル登頂の成功」と題して以下のようにその業績を称賛している。

「世界第八番目の高峰、ヒマラヤのマナスル山頂を目指していた日本登山隊はついに成功した。一九五三年のイギリス登山隊のエヴェレスト登頂成功以来、八千メートル以上のヒマラヤの高峰は英、伊、独、仏、オーストリアなどの登山家によって次々に

山頂をきわめられたが、このヒマラヤ登山史の中に、わが横隊長をリーダーとする登山隊の名が加えられたことは、まことに意味深いことであり、五カ年の苦心がようやく実った喜びを禁ずることができない。

こんどのマナスル成功は、もちろん何より天候に恵まれたためだろう。九日と十一日の二回も登頂成功の報は天の時が幸いしたことを語るものだ。しかし、すべての大事業がそうであるように、横隊長を中心にした隊員の団結、周到な科学的準備、そのうえに不幸にして成功しなかった先人の経験などの積み上げ、つまり人の和がなかったら、今日の成功はもたらされなかったかもしれない。エヴェレストに成功したハント隊長は、世界第一峰をめざす三十年の歴史が成功させたと言ったことがある。山に登ることそれ自身に不屈の精神が必要であることはいうまでもないが、長年にわたって計画を進めるのにもやはり同じことがいえる。

この点について、五年前にマナスル登頂計画が発表されて以来、主催者である日本山岳会と毎日新聞社に対して国民の各層から、経済的に、精神的に、あるいは技術的にあらゆる後援が寄せられ、いわば国民的支持の下に行われた壮挙だったことを我々は感謝とともに思いかえす。こういう国民的支持こそ、今度の成功の大きな背景であった。

しかし、世界の高峰をきわめることが、一体何の役に立つのだ、という疑問をい多く人もあるにちがいない。登山家自身にはヒマラヤの雪に消えたジョージ・マロリーの「なぜなら山がそこにあるからだ」という答えで十分であろう。人間の体力と精神力の限界をギリギリまで発揮する登山、しかも長期にわたる不屈の計画と科学的準備の必要なマナスルの成功は、ある意味で、日本人の力を象徴的に示したものといえる。そしてそれは世界のどこの国の人々にもたたえられる力の示し方である。エリザベス二世の戴冠式の日エヴェレスト成功の報を受けたイギリス国民が、うにいわれぬ明るい感情に支配されたように、マナスル成功が日本人に与える精神的影響は決して小さなものではないだろうと思う。」

この社説には、計画から4年間にわたるマナスル登頂に関わる社会的な意味付けが網羅されている。世界との競争の上に達成した偉業であり、日本人の団結心と科学の成果であり、そして国民的な支持があつてこそであり、またそれが日本人に精神的な影響を与えるというものである。以下、一連の報道の中で、マナスル登頂がどのように意味付けられてきたのかを見る。



### 3. 競争型イベント 世界との比較 「ヒマラヤ・オリンピック」

マナスル登頂の一連の報道のキーワードの一つが「オリンピック」である。計画が実行に移された1953年段階から、「ヒマラヤ・オリンピック」という語が使用されている。日本人にとって「オリンピック」とは、いうまでもなく、日本が世界に認められる、さらに言えば西洋に認められる一大機会であり、戦前より、オリンピックは日本にとって重要な意味を持っていた<sup>36)</sup>。戦前のアムステルダム、ロサンゼルス、ベルリン大会の日本選手の活躍は、現在の大新聞の発展期とも重なり、重要な報道コンテンツとして「発見」され、そして大々的に報道され、その結果、オリンピックは世界のどの国よりも重要なイベントとして日本人に記憶されてきた<sup>37)</sup>。戦後も、1948年のロンドン大会は敵国として招待されなかったが、日本の国際社会への「復帰」、国際社会での「評価」の象徴として、「オリンピック」は意味づけられていた。

さて、一大プロジェクトであったマナスル登山において初登頂を達成したことは、多くの先進国家との競争の中、そこでの勝利を意味した。それはまさに日本人としての誇りと自信につながる共通の経験と位置づけられ、それが「オリンピック」という表現を使用したであろう。しかし、各国がそれほど国を挙げてヒマラヤ各峰の初登頂を競っていたわけではない。1950年代は、第二次大戦の惨禍から回復し、各国の登山家たちが、海外、とりわけヒマラヤの高峰に挑戦する余裕ができてきた時代でもあったと言えよう。そして1950年代は、8000m級のヒマラヤの山々が次々と初登頂され、他国にとっても威信をかけたイベントであった面もあろう。例えば、1953年のイギリス隊がエベレストの頂上に到達したのは5月29日であったが、伝送技術の関係で6月2日エリザベス女王の戴冠式の朝に報道された。しかし、これはあくまで「偶然に (by coincidence)」に達成されたものである<sup>38)</sup>。

ちなみに、エベレスト初登頂がどのような記事で報道されているのか。1953年6月2日の英国の日刊紙「タイムズ」(The Times)には「ヒラリーとテンジンが頂上に到達」という見出しで二人の写真とともに記事が掲載されている。見出しも取り分け大きなものではなく、最初の挑戦の失敗から、後援団体の紹介、そして登頂の経過、さらに別枠で、1933年以来のエベレスト登頂への挑戦の歴史について解説され、最後に、ニュージーランド首

36) 黒田勇 (1999)、坂上康博 (1997)、浜田満絵 (2015) 現在でも「オリンピック (五輪)」は、世界的な大会を象徴する言葉として好まれている。

37) 黒田勇 (1999) 191~202頁

38) Garfield, S. (2003)

相からの祝いのコメントが掲載されている<sup>39)</sup>。ただ、世界最高峰の初登頂にもかかわらず、日本のマナスル登頂のような「興奮」したニュアンスは記事の大きさからも内容からも感じられない。さらに、登頂した二人、つまり隊員のヒラリーとシェルパのテンジンという二人の個人が称賛されていることも日本の記事とは異なる点であろう。

1956年5月15日毎日新聞朝刊の連載記事「ヒマラヤの山と人々」において、1953年にイギリス隊によるエベレスト初登頂をはじめとして、イタリア隊のK2初登頂などヒマラヤ15座の8000m級の山々を各国の登山隊が登頂している状況を「ヒマラヤ・ラッシュ」と表現している。翌5月16日の同連載記事では、各国登山隊が未登頂のヒマラヤの山を征服しようとネパールに集結している様子を「ヒマラヤオリンピック」と表現している。しかし、英国やイタリアの当時の新聞記事を見る限り「ヒマラヤオリンピック」やそれに類する用語は使用されていない。他の初登頂にしても、「国の威信」をかけて取り組んでいたという報道は見つかっていない。これは日本にとっての国際競争=オリンピックであったというのに過ぎない。

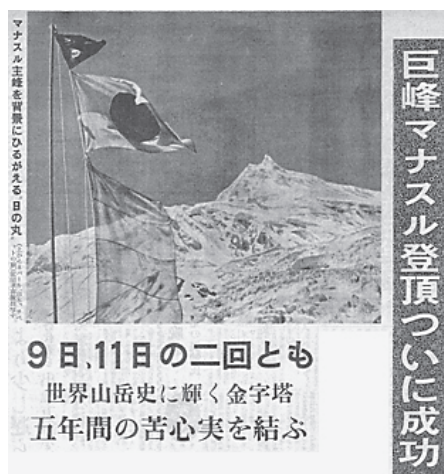
もちろん、先述の通り、日本においては「オリンピック」という表現は、国際的なもの、そして日本人が海外で評価される場という特別の意味合いを持って使用されてきた。その意味では、「マナスル登頂」をオリンピックの価値や意味合いに節合することで、国際的な快挙という意味合いを持たせたかったことは、これまでの新聞報道の経過から見ても十分に理解できるし、敗戦後11年の読者・国民もそのことに「心を躍らせた」ことは推測できる。

一方で、本来のオリンピック大会と同様に、海外ではこの「快挙」は大きく報道されていない。「タイムズ」においては、5月18日付で“MANASLU CLIMBED BY JAPANESE”の見出しで99ワード、23日付で詳報として“NEW ROUTE FOUND”の見出しで151ワードの記事が掲載されたにすぎない<sup>40)</sup>。そして、その中には、当然ながら「オリンピック」との比喩はない。

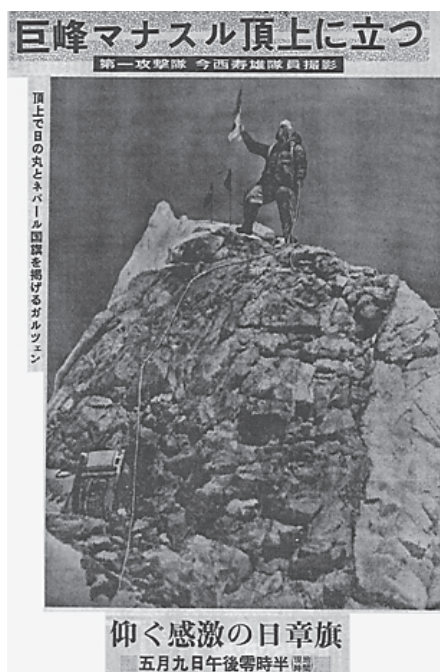
さらに国際的競争を意識させるという点では、「日の丸」の写真が多用されていることも特徴であろう。マナスル登頂後の山頂での写真はもちろんのこと、登頂以前の連載記事においても「日の丸」は何度も登場する。登頂成功の連絡が入った18日には、頂上に立つ隊員の画像は到着していないので、マナスル頂上を背景としてベースキャンプにはためく「日の丸」掲載しているが、この写真によって、この挑戦全体と、登頂隊員、そして読者が「日

39) The Times, 2, June, 1953

40) The Times, 18, 23, May, 1956



毎日新聞 (1956年 5月18日朝刊)



毎日新聞 (1956年 5月28日朝刊)

の丸」を媒介として、「日本人」による制覇、「日本国家」による達成という意味付与がなされている。これによって、実体としては存在しない競争する外国勢の姿も可視化する効果を持ったと考えられよう。

ただ、5月28日に初めて掲載された頂上に立つ写真には「頂上で日の丸とネパール国旗を掲げるガルツェン」とのキャプションをつけ、ネパールにも言及しているが、それよりは大きな活字の見出しで「仰ぐ感激の日章旗」と、写真全体としては「日本による達成」との意味合いが強くなるように配置されている。

#### 4. 科学の強調

もう一つの成功のカギとして表現されるのが「科学」である。5月17日毎日新聞朝刊では「陰に数千の科学陣」という見出しで、登山の装備品についても言及している。また同日夕刊では「マナスル登頂の陰の力 募金・装備・食糧に情熱と科学の粋をつくす」と「科学」が強調されている。

もちろん、「科学」の強調は毎日新聞の新聞事業としての範囲にとどまるものではなかつ

た。1956年5月18日朝日新聞朝刊では、前述のように、「成功の陰に科学の力」とそれぞれ見出しが付けられ、酸素発生器や軽量化されたボンベ、山岳食などの高性能ぶり、そしてそれを作った工具の苦労が書かれている。

また、1954年日本山岳会会長の楢有恒が、登山に用いられる装備について「その準備する食糧や装備について一国の科学や産業の水準の高さを示すといわれるほどである」と、ヒマラヤ登山をその国の経済や科学水準に関わらせて語っている<sup>41)</sup>。マナスル登頂で使用した装備品はすべて日本製であり、登頂した隊員の精神力、体力、技術力のほかにも科学技術の進歩という点でも、世界に対抗しうる日本の誇りとして取り上げられている。読売新聞においても同日の夕刊で「”登山科学”の勝利 日本隊のマナスル征服」という見出しのように「科学」という言葉を用いている。

さらに翌19日朝刊の「編集手帳」においても「科学」が登場する。そして「…科学的物質的な要素が結合しなければダメだということを今度のマナスル登頂は教えた。(中略)単なる「特攻隊精神」だけでは自殺的手段とえらぶところがない。戦後日本がつかんだ合理主義的精神の輝かしい勝利の姿をわたくしはこの成功に見る。」(「読売新聞」1956年5月19日朝刊)と、戦前の「精神主義」と対比させつつ、戦後の「合理性」「科学性」を称賛している。

## 5. 戦争用語

マナスル登山隊の報道には、「攻撃」「征服」といった戦争を連想させる言葉が多用されている。これについては、戦前期から、とりわけスポーツ記事において確立されていて目新しいことではない。

スポーツにおける戦争関連の用語について、有山輝雄は、全国中等学校優勝野球大会を例に、「スポーツの試合は戦争の模擬化」とした上で「初心者にとって分かりやすい説明であることはたしかだが、反面で、戦争が抽象化されてスポーツに転生する過程で、スポーツの属性となった遊戯性という要素を切り落として」しまったと指摘する<sup>42)</sup>。もちろん、野球用語が翻訳される中で「遊撃手」や「一死」「封殺」「生還」など、新聞報道以前に使用されてはいるが、大学野球も含めて報道合戦の中で、ますます「戦争」を模した用語が多用され、さらに、オリンピック出場とともに、「健闘」「制覇」「凱旋」などの用語が好んで

41) 日本山岳会編 (1954) 2頁

42) 有山輝雄 (1997) 99頁

使用されるようになる<sup>43)</sup>。

戦後、マナスル遠征報道においても有山の言う高校野球での表現と同様に、戦争を連想させる用語が多く使用されたが、それが戦前の「軍国主義の残滓」ということではなく、スポーツ報道の戦争用語の伝統に従ったとみるほうが適当であろう。ただ、マナスル登頂に関して、この遠征と成功が国家的であり、世界の中での日本の威信にかかわるイベントであるということの意味づけたいとすれば、戦前の国家主義的な体制の下でのオリンピック報道との連続性を見ることができるだろう。

## 結語にかえて

### 1. 他のマス・メディアのマナスル報道

本研究ノートにおいては、新聞報道のみに限定して述べてきた。もちろん、ラジオにおいても、20日「マナスル征服のニュース」(NHK ラジオ第一、23:10-23:20)を当日のラジオ・テレビ欄に見ることができる。さらに、大阪の新日本放送(NJB、現毎日放送)は、1954年の第一回の遠征から、多くのマナスル関連番組を制作している<sup>44)</sup>。

まず、1953年8月には録音ルポルタージュ「マナスル紀行」(30分全2回)、54年8-9月には「ヒマラヤ録音紀行」(15分全5回)を放送。さらに54年4月から6月にかけて、現地録音を使用して、KRとの共同制作でドラマ「ヒマラヤ オリンピック」(30分、全12回)を放送している。登頂に成功した56年には、成功の報を受けて、5月18日特別番組として「マナスル征服」別宮貞俊、三田幸夫などの元遠征隊長を交えての座談会を放送、さらに6月16日には現地座談会「マナスル登頂に成功して」として現地録音で横隊長や今西久雄隊員たちに語らせている。さらに、7月8日と15日には現地録音とドラマを交えた交響楽詩「マナスルの凱歌」(30分全2回)を放送している。大阪の朝日新聞を母体とした朝日放送の社史<sup>45)</sup>には、関連特別番組がないことから見れば、やはり、新日本放送は毎日新聞とのつながりで、マナスル登頂を単なるニュースだけではなく、重点的に報道・制作していたことが推測できる。

テレビについては放送開始四年目で、マス・メディアとして十分な報道体制を持っていなかったものの何らかの報道はされたと思われるが、現在まで明確な資料は発見できてい

43) 浜田幸絵 (2016) 174-204頁

44) 以下の新日本放送の番組の記述については、毎日放送 (1991a) 69-70頁、毎日放送 (1991b) 79-80頁

45) 朝日放送 (2001)

ないので次稿で触れたい。

## 2. 表象文化のなかの「登山」

その他のメディアでの報道は、本論でもふれたように、毎日新聞記者の依田孝喜撮影によるドキュメンタリー記録映画「マナスルに立つ」(映配・毎日映画社制作)、同じく依田による写真集、さらに記念切手にも、それをメディアに含めるならば、「国家的な偉業」が図像化されている。

マナスル初登頂と、一連の報道が日本社会に様々なインパクトを与えたが、その考察については次稿で改めて考察したい。このイベントと、日本社会、あるいは文化状況との関連については本研究の大きなテーマであり、この課題にこたえる必要があるが、本研究ノートはその準備作業と位置づけている。

ただ、マナスル登頂を契機に少なくとも「登山」にはあらためて注目が集まったことは間違いない。登山は、当時の日本人にとって何を意味したのであろうか。あるいは登山には青年のどのような「欲望」が表現されていたのだろうか。そのあたりを大衆文化のなかにヒントを見出すこともできよう。

例えば、マナスル初登頂成功と同年、56年11月から朝日新聞では井上靖の小説「氷壁」の連載が開始された。そして文庫化もされてベストセラーとなり、後に映画化やドラマ化もされている。小説では「登山とは自然との闘い、自己との闘い」「フェアプレーの精神」「登山家は勇敢」という言葉が登場し、主人公の登山家としての純粋さや友情の深さが描かれている。その他、新田次郎「孤高の人」(新潮社、1969年)は、のちに連載漫画ともなっている。また、石坂洋次郎「颯風とざくろ」(講談社、1966年)も、登山と事故がモチーフとして扱われ、これもテレビドラマ化や映画化がされている。

さらに、1950年代から60年代広く歌われた「雪山賛歌」は、ダークダックスが「発掘」し、1958年9月にレコード発売され、翌59年の第10回NHK紅白歌合戦で歌ったことで、広く知られるようになった。さらに、NHKの「みんなのうた」では、放送開始間もない61年12月から62年1月に放送され、さらに広く知られ、学校でも歌われるようになった。この雪山賛歌は、1927(昭和2)年1月、京都帝国大学山岳部の西堀榮三郎(のち第一次南極観測越冬隊長)らが、アメリカ民謡「いとしのクレメンタイン(Oh My Darling, Clementine)」のメロディーに歌詞を当てはめたという<sup>46)</sup>。

46) 高村奉樹(1999)3頁

以上は一例であるが、50-60年代の大衆文化の中で広く取り上げられた「登山」とマナスル初登頂との関係については、稿を改めて考察していきたい。

<参考文献>

- 有山輝雄「甲子園野球と日本人」吉川弘文館、1997年  
朝日放送社史編修室「朝日放送の50年」朝日放送、2000年  
朝日新聞百年史編修委員会「朝日新聞社史・昭和戦後編」朝日新聞社、1994年  
ダニエル・ダヤーン、ユリヤ・カツ (浅見克彦訳)「メディア・イベント」青弓社、1996年  
藤田健次郎「中高年、山と出会う」山と溪谷社、1997年  
深田久弥「ヒマラヤ登攀史」岩波新書、1957年  
深田久弥「日本百名山」新潮社、1964年  
布川欣一「明解日本登山史」ヤマケイ新書、2015年  
浜田幸絵「日本におけるメディア・オリンピックの誕生」ミネルヴァ書房、2016年  
「阪神間モダニズム」展実行委員会編著「阪神間モダニズム」淡交社、1997年  
堀田弥一「ヒマラヤ初登頂」筑摩書房、1986年  
井川充雄「メディア・イベントとしての南極観測支援事業」『メディア史研究』  
池田常道「現代ヒマラヤ登攀史」山と溪谷社、2015年  
井上靖「氷壁」新潮文庫、1963年  
石坂洋次郎「颱風とざくろ」講談社、1966年  
菊池俊朗「山の社会学」文藝春秋、2001年  
小泉武栄「登山の誕生」中公新書、2001年  
小泉武栄「登山と日本人」角川ソフィア文庫、2015年  
近藤信行編「山の旅 大正・昭和篇」岩波文庫、2003年  
黒田勇「ラジオ体操の誕生」青弓社、1999年  
毎日放送40年史編纂室「毎日放送の40年」毎日放送、1991年 a  
毎日放送40年史編纂室「毎日放送の40年 資料編」毎日放送、1991年 b  
毎日新聞百年史刊行委員会「毎日新聞百年史1872→1972」毎日新聞社、1972年  
毎日新聞社編「『毎日』の3世紀：新聞が見つめた激流130年上巻・下巻・別冊」毎日新聞社、2002年  
横有恒編「マナスル登頂記」毎日新聞社、1956年  
松田雄一「マナスル登頂と登山ブーム」日本山岳会『山』2005年9月号  
三好善一「協会の組織強化——ジャパン・ツーリスト・ビューローとの合併に就いて」『旅』1934年10月  
新田次郎「孤高の人」新潮社、1969年  
日本ヒマラヤ協会 (監修)「ヒマラヤへの挑戦2」アテネ書房、1991年  
日本放送協会「20世紀放送史」NHK出版、2001年  
酒井敏明「世界の屋根に登った人々」ナカニシヤ出版、2005年  
日本山岳会編「マナスル」毎日新聞社、1954年  
坂上康博「権力装置としてのスポーツ」講談社、1998年  
鈴木正崇「山岳信仰——日本文化の根底を探る」中公新書、2015年  
戦時下日本社会研究会「戦時下の日本」行路社、1992年  
高岡裕之「観光・厚生・旅行」、赤澤史郎、北河賢三編『文化とファシズム』日本経済評論社、1993年

- 高村奉樹「『雪山賛歌』の歌詞著作権由来記」『AACK(京都大学学士山岳会) Newsletter』No.13、1999年1月
- 田井玲子「六甲山をめぐるスポーツと娯楽」阪神間モダニズム展実行委員会編『阪神間モダニズム』淡交社、1997年
- 津金澤聰廣編「近代日本のメディア・イベント」同文館、1996年
- 津金澤聰廣・有山輝雄編「戦時期日本のメディア・イベント」世界思想社、1998年
- 津金澤聰廣編「戦後日本のメディア・イベント1945-1960」世界思想社、2002年
- 梅棹忠夫・山本紀夫 編「山の世界」岩波書店、2004年
- ウォルター・ウェストン (水野勉訳)「日本アルプス再訪」平凡社、1996年
- ウォルター・ウェストン (青木枝朗訳)「日本アルプスの登山と探検」岩波文庫、1997年
- 安川茂雄「増補近代日本登山史」四季書館、1976年
- 山崎安治「日本登山史」白水社、1969年
- 山崎安治「日本登山史・新稿」白水社、1986年
- 依田孝喜「マナスル写真集」毎日新聞社、1956年
- 吉見俊也「メディア時代の文化社会学」新曜社、1994年

〈新聞・雑誌〉

- Garfield, S., 'High Society', The Observer, Sunday 30 March 2003, online at <https://www.theguardian.com/world/2003/mar/30/everest.features>
- The Times, (The Times Digital Archive, 1785-1985, <http://find.galegroup.com/ttda/start.do?prodId=T TDA&userGroupName=kansai>)
- 朝日新聞 (朝日新聞記事データベース聞蔵Ⅱ、<http://database.asahi.com/index.shtml>)
- 毎日新聞 (毎索、[https://dbs.g-search.or.jp/WMAI/PCU/WMAI\\_ipcu\\_menu.html](https://dbs.g-search.or.jp/WMAI/PCU/WMAI_ipcu_menu.html))
- 読売新聞 (ヨミダス歴史館、<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>)

—2017.9.4受稿—